

学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告 (4)

¹高田麻美 ²榊原健太郎 ³山本真理子 ⁴大日向浩
²小堀馨子 ⁴倉山智春 ¹福田八重

¹帝京科学大学教職センター
²帝京科学大学総合教育センター
³帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科
⁴帝京科学大学こども学部学校教育学科

The report on the coordinator training (4)

¹Asami TAKADA ²Kentaro SAKAKIBARA
³Mariko YAMAMOTO ⁴Hiroshi OHINATA ²Keiko Grace KOBORI
⁴Tomoharu KURAYAMA ¹Yae FUKUDA

Key words：コーディネーター、チーム援助、学校心理学、大学教育、一次的援助サービス

1. はじめに

本学における学生支援の取り組みの1つとしてチームによる支援（チーム援助）の実践があり、その実践を支えるためのコーディネーターの養成を目的とした教職員向けの研修が開始されていることは本紀要 Vol.10-12（2014-2016年）の報告にあるように周知の通りである¹⁾。ここでいうコーディネーターとは、大学での学修や生活などに苦戦している学生へ向けた支援について支援資源となる人や機関とつなぐ調整役を担う者を指す。本研修会の趣旨は、この調整役の知識・技量について専門的な知見による理論学習および事例研究に基づく訓練を行ない、研修を重ね、実際に教職員にコーディネーターとして活動してもらうことにある。

2016年度においても本研修会を実施した。以下、

その内容を報告する。

2. 研修計画

過年度において実施した研修は、援助についての学問体系である学校心理学（石隈，1999）²⁾を基盤としつつも、文献に基づく講義に終始することなく、カウンセラーなどの現場の方を交えた学習を重視してきた。今年度もこの方針を踏襲した。今年度については特に、初日を【理論編】、2日目を【事例編】と構成し、参加者の理解度と関心とに応じて出席できるよう運営面でも工夫を凝らした。表1がその研修内容である。なお、昨年度と同様、今年度についても特定の組織に基づく研修会ではなく、研修の必要性を感じる有志から成る自主研修という形式で実施した。

表1 コーディネーター養成研修の内容構成

	日付	内 容	講 師	参加数
1	9/5	援助についての基本的な考え	樽木靖夫 (千葉大学教授)	8 名
2		授業における一次的援助サービス	樽木靖夫	7 名
3	9/6	学生の支援について —学生相談室の事例から—	小林祥子 (本学カウンセラー)	10 名
4		本学のいじめ対応に関する検討	高田麻美・樽木靖夫	9 名
5		総合討論	高田麻美・榊原健太郎	9 名

【理論編】の「援助についての基本的な考え」と「授業における一次的援助サービス」のセッションでは、元中学校教師で学校心理学の専門家である榊木靖夫講師（千葉大学教授）から学校心理学の基礎的・実践的な内容を学んだ。【事例編】の「学生の支援について—学生相談室の事例から—」のセッションでは、小林祥子講師（本学カウンセラー）から学生支援の実践例を学び、「本学のいじめ対応に関する検討」ではコーディネーター役を務めた高田が事例報告を行なった。最後に「総合討論」のセッションを設け、参加者の関心事や困りごとに関して意見交換を行なった。

3. 研修内容

各セッションの研修内容について、概要を以下に記す。なお、セッション4と同5に関しては個人情報保護の観点から内容記載を控える。

(1) 【セッション1】援助についての基本的な考え

最初に2日間の研修の基軸となる「援助（救助と援助の違い）」「三段階の援助サービス」「チーム援助」が紹介された。このうち、セッション1では「救助と援助の違い」「援助者同士の連携」の説明に重点が置かれたため、報告者は、このセッションのねらいが「学生を援助する」という場合の「援助」という概念について、「救助」とどのような違いがあるのか、また、「援助する人同士の良い連携」について理解を深めることにあると受け取った。

学校心理学に基づく「援助」とは、一般に学生の危険な状態におかれた要因を他者が取り除く「救助」ではなく、むしろ学生が自らその問題に対して解決する力を身につけるように手助けすることであると示された。つまり、学生が困っている事柄について、救助者が緊急的・即時的にその問題の解決に至るように主導することが「救助」である。他方、「援助」とは、援助者が困りごとを学生と共に整理し、何が問題で、どのようなことに注意し、対処するのが良いかといった一連の作業に学生に寄り添うことを通して、学生が困っている事柄に自ら対処する力を身につけさせることと理解できる。

また、この「援助」では、教職員一人の力で取り組むのではなく、教職員が知りえない学生の別の側面について、他の援助者—スクールカウンセラーや家族、友人—との協力も大切となる。こうしたチームで援助していくことが「チーム援助」であるが、この際の援助者（パートナー）間の関係は、決して

上下関係に基づくものではなく、お互いが尊重しあい、対等な立場であることが重要であるということであった。

報告者は、以上のような「援助」のあり方を学びながら、「救助」と「援助」の単純な意味の違いだけでなく、次のような性質の違いがあると考えた。例えば、他者が困難を除去する「救助」は被援助者にとって即効性がある。一方、「援助」は被援助者が本人の力で解決することができるよう、援助者は励ましつつ見守るため、「救助」と比べて時間や手間を要する。しかしながら、「援助」の場合、被援助者が自らの力で解決をしたという手ごたえが残るため、次の一歩につながっていくという効果が得られる。こうした性質の違いを考えると、問題解決に時間を要する「援助」について、多くの人々からの理解を得ることが必要であろう。ただし、知識的な理解に留まらず、その重要性や必要性も合わせて理解を得ていくことが求められる。

(2) 【セッション2】授業における一次的援助サービス

セッション2では、榊木講師から「大学教員が行なうべき一次的援助」について話題提供がなされた。なかでも、教員が全学生と関わる「授業の充実」は、「一次的援助と捉えることができる」という考え方が示されたことが特徴として挙げられる。

「授業の充実」について、榊木講師の実践事例が示された。ある授業で榊木講師が「傍観者効果」を説明したところ、学生から次のコメントを寄せられたという。すなわち、一部の受講生が「私語」をしているにもかかわらず、「私語をする人を注意できない状況」について、「『私語』をする心理は大人数の匿名性による『社会的手抜き』で、『私語をする人を注意できない状況』は、『傍観者効果』なのではないか」という内容であった。

榊木講師は上記コメントをうけ、私語問題に対応すべく、受講生間で匿名記述による紙上討論を数回実施した。紙上討論を重ねるなかで、私語に否定的な意見が登場し、これに対する共感の声が広がっていったという。これだけに留まらず、次の意見を契機に紙上討論はさらなる広がりをみせるようになる。すなわち、「授業に出る目的が学ぶことではなく、単位を取るようになってしまっていると思いました」という意見である。そこから、学生たちは学ぶ目的、さらには、教養教育のあり方についても議論を深めていった。

こうした実践を行なった理由について、樽木講師は「今起きている問題をどのように学生の学びに繋がられるかというのが私の一次的援助の基本的なスタンスです」と述べていた。これは、冒頭に記載した「授業の充実」が一次的援助となるという位置付けとも一致する。

大学生として人生を生きる時、授業も自己の人生の構成要素であるのだが、そのことを実感できるような授業実践を行なわなければ、学生自身が今生きている人生と授業での学びとは乖離してしまう。紙上討論を繰り返すなかで、学生は次のような手ごたえを得たのではないだろうか。すなわち、一人一人の考えが深まること、他者がそれに関与する存在と認識すること、授業参加者の考えが深まる集団を自らの手で構築することである。これらのことから、「授業の充実」は学生生活の充実を支援する働きがあると考えられる。

加えて、このセッションでは一次的援助となる「授業の充実」のためには、各科目を支えるカリキュラムポリシーや科目担当のあり方など、大学での教育をどう意味づけるのか、広い視座で捉えることの必要性も語られた。また、そこに関わる大学の教員自身が、教育や研究といった大学教員としてのライフデザインにどう向き合っているのか考える必要性も述べられた。議論を通じて、参加者自身が大学教員としての生き方を振り返る機会となった。

(3)【セッション3】学生の支援について—学生相談室の事例から—

セッション3では、本学の小林カウンセラーから、学生相談室を訪れた学生の事例の紹介があり、参加者間で議論が行なわれた。個人情報保護などの観点から事例の詳細は記載せず、議論の概要を報告するにとどめる。

セッションのなかで、「合理的配慮」を要する学生に関する問題が議論された。今年度からいわゆる「障害者差別解消法」が施行され、大学は学生の障がいに応じて支援をすることが求められている。教職員が「合理的配慮」に関する理解を深め、行動することが望まれる。

基礎学力が不足しているとみられる学生が本学には一定数みられる。特に数学や物理などの理系科目の場合、「能力的にできない」のではなく「やればできるのだが、高校で文系だったためにあまり学習経験がない」学生も多い。二次的援助サービスとし

てはリメディアル科目を設置するなどのカリキュラム上の配慮が挙げられ、学校教育学科で行なわれている土曜日の基礎学力養成講座はその1つである。この他にも全学的な学習支援センターを設置して学生からの質問対応などの学習支援を行なうべきであるという意見が出された。入試で理系科目の試験をせずに入学を認める以上、それに見合うだけの配慮・援助サービスを大学として提供しているのかという点について考えなければならない。

教養科目担当の教員と専門科目担当の教員の間の交流が少ないことも問題点として挙げられた。以前、総合教育センターと各学部の間で行なわれていた交流会である「教育懇談会」を再度実施してはどうかという案が出された。

4. 参加記

研修内容をふまえ、参加者は学生支援に関してどのような考えを持つに至ったのだろうか。そこで、次に3名の参加記を紹介したい。

(1) コーディネーター養成研修会に参加して

教員として学生と接する毎日だが、学生が抱える困難や問題は実に様々であることに気づかされる。将来への希望と不安を抱え多感な時期を過ごす学生にとって、教員の対応が一人の学生の人生に影響を与える可能性もあることから、教員としてできることを少しでも学べればと研修会に参加させていただいた。本研修会には、専門や所属を異にする教職員から学生支援の事例や支援に対する考えを学ぶ機会を得た。ここでは研修での学びとそこで感じた課題を三つ報告させていただく。

①被援助者自身による問題解決：救助するのではなく「被援助者が自ら問題解決できる」援助が求められているという点は、自らの支援のあり方を考える上で重要な助言であった。教員が先回りして支援することは、学生が自ら問題解決するためのチャンスを奪ってしまうことになる。一方で、自分の意思を声に出し支援を求めることができる学生とそうでない学生がいることも事実である。学生間で支援における不平等が生じないためにも大学として支援を求めやすい環境・雰囲気づくりが求められると感じた。

②援助者間の連携／コーディネーターの意義：研修では異なる専門性や役割を持つ者がチームで援助を進めていくコンサルテーションを学んだ^{*1}。私は自身の経験からチーム援助におけるコーディネー

ターの意義を強く感じている。時に学生は役割の異なる援助者に対して、支援を求めて同じ話を繰り返して伝えなければいけないということがある。コーディネーターの存在やコンサルテーションの場合は、援助者間の連携を強めることにより、学生のみならず援助者の負担をも減らし、円滑な援助を達成するために不可欠だろう。

③「合理的配慮」の理解：小林カウンセラーより、「合理的配慮」の窓口があれば学生相談室を利用しなくても良い学生がいるというお話があった。学生が求めているのは「相談」ではなく「バリアの解消」であるためだ。障害者差別解消法が施行された現在、大学教育に関わる個々人が「合理的配慮」の理解を深め、学生支援への高い意識を持つために全学的な教育が求められていると感じた。

学生支援は一例一例が試行錯誤という状況である。本研修会のように、可能な範囲で事例を共有する機会を積み重ねていくことは、自身の不安を軽減させ、より良い学生支援への自信へとつながるように感じる。貴重なお話をいただきました榊木先生、小林カウンセラーに感謝申し上げます。

(2) 全体の感想

今回のコーディネーター養成研修会は、1日目を理論編と位置づけ、榊木講師による講演、2日目を事例編として小林カウンセラーによる事例検討やコーディネーターの役割および総合討論という2部構成で予定された。理論編の主旨は、昨年度までと同様に、初等中等教育の現場で培われてきた学校心理学に基づく「チーム援助」とそのためのコンサルテーションやコーディネーターの役割について学ぶことである。一方、事例編では、チーム援助を大学での学生支援に適用する際の実践方法や問題点を探ることを主眼に置いたものといえるだろう。

研修会の開始にあたり、まずは各参加者が初参加の小林カウンセラーに対して自己紹介をすることになった。その際、文字通りの自己紹介に加えて、それぞれの学生支援に対する問題意識が語られた。その個々の話題について、お互いの意見や感想などを述べ合う時間を十分にとったことで、様々な話題が上った。講演中も自由に発言することができたため、各参加者から様々な質問や疑問、コメントが寄せられた。例年に比べて、参加者からの発言が非常に多かったという印象を持った。

2日目の午前は、小林カウンセラーによる本学の事例紹介とその検討であった。その事例紹介の前

に、小林カウンセラーからのリクエストで、「それぞれが本学においてどのような学生支援をしたいと考えているか」を述べることとなり、そのことに端を発した議論が再び活発に行なわれた。

参加者同士の議論の活発さは、参加者が「学習者」から「実践者」に立場を変えつつあることを如実に表すものだろう。この研修会を企画・運営された榊木講師によって蒔かれた「種」が、世話役を引き継いだ榊原先生と高田先生の尽力によって着実に「芽」吹き始めていると感じた。事実、二人の先生は、既に総合教育センターが関わる学生支援において、コーディネーターとしての活動もされていた。一方で、その実践報告から、コーディネーター役を引き受けることに伴う様々な苦労や悩みの一端を窺うこともできた。こうした学生支援に理解と志ある先生方の活動は、残念ながら大学としての学生支援体制がまだ整っていない現状では、その位置付けがボランティア活動のように受け取られがちである。そのため、関連する教職員との意思疎通を含めた調整が上手くいかないという問題点も浮かび上がってきた。

今、芽を出しつつあるこの学生支援の「若木」が枝葉を伸ばし、豊かな果実をつけるには、適切な土や光、水、そして肥料といった「環境」を整えることが不可欠となってくるのは間違いない。そうした「環境」整備、すなわち「学生支援に向けた全学的な体制」づくりは、様々な形で「芽」が窺えつつある。しかし、少なくとも本稿執筆時点においては、今後のロードマップどころか、大学としてそうした学生支援活動にどのように取り組もうとしているのかさえ明らかにされていないのが現状だろう。

今回、チーム援助に基づく学生支援を本学で実践した際の報告とその上での様々な問題点が議論された。こうした研修会2日間の活発な発言や意見交換の内容については、現在抱えているケースもあるので残念ながらここには書けない。しかし、着実にこの研修会で学んだことが、参加者のそれぞれの立場で実践されつつあることをお互いを知ることができた。それとともに、同じ学生支援という目的に向かって、学生の援助・支援に必要なスタッフの育成・実践活動と大学組織としての学生支援体制の構築、つまり「人材」と「組織」が整備され、連携して（両輪となって）活動できる体制づくりが何よりも必要であることを例年以上に感じた研修会でもあった。

(3) コーディネーター研修会に参加して

昨年度、本研修会に初参加し、学習支援の場における複合的ヘルパー（教員）の役割を初めて具体的に知ることができた。その知見は大変有意義なものであったが、実際に教員生活の場で活かそうとすると、途端に戸惑うことも多かった。筆者の場合は幸いにして研修会の参加者と研修会後も身近に接触できる環境にあったため、疑問が生じるたびにそれを解決することができたので、大きな問題は生じなかった。しかし、もしも自分のような恵まれた立場にいない場合には、その者が現場で生じた悩みを即時的に打ち明けやすいようなフォローアップを行ない、具体事例に対して求められたらアドバイスできる体制が、オフラインであれオンライン上であれ、存在するとよいのではないかと感じた。

今年の内容については、昨年と同様＜救助と援助の違い＞が鍵になると思われた。以下に重要なポイントを記す。

- ・福祉領域では、最悪の状況回避に「救助」は必要である。
- ・教育領域では、主に「援助」が必要である。
- ・「援助」の場合＜被援助者自身による問題解決を目指す＞ということが重要である。

過去20年程の学校教育体験において、私は40人のクラスであれば、90分・15回で40人の一人一人の方にお仕えする、という気持ちを以て教育に当たってきた。しかし、90分で40人の方一人一人に仕える、という方針は、事実上は絵に描いた餅であり、心意気以上のものではなかった。結局は授業内メッセージ発信と、個別発生事例への対応しかできなかった。しかし、昨年の研修を受けて、自分では微力だと思っていた授業内メッセージ発信が、立派な一次的援助に該当することを知ったのは大いなる励みとなった。

一方、個別発生事例に関して、＜被援助者自身による問題解決＞に関しては、その敢えて一歩引く姿勢をもっと強化していった方がよいことを、昨年の研修会後からの一年間の対応体験と今回の研修会で痛感した。よく「子に魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えるのがよい」と言われる。本当にその子が栄養失調で倒れて死にそうな場合は別として、経済的貧困に留まっているレベルであれば、この慣用句は的を射ていると思われる。魚の釣り方を教え、しかも自分で釣れるようになるように見守

る、ということが肝要だと感じた。

しかも、たった1回の講演会とは違い、我々大学教員は、卒研指導をしない総合教育センター教員であっても、少なくとも15回連続して見守るチャンスが与えられている。学科の専任教員の場合は4年間見守ることが可能である。＜仕える心＞があればこそ、安易に手出しをせず、問題解決ができるように思考転換の面に焦点を当てて言葉で助けることが最大の＜仕え＞になるという実感を、本研修会で改めて強化することができた。

最後に紙上討論という新しい手法を学べたことも、筆者にとっては今回の大きな成果であった。紙上討論には何段階かのレベルがあり、全ての段階を踏むことは授業時間の制限があって難しいかもしれない。しかし、全てのレベルを完璧に行なうのではなくとも、一部の段階を行なうだけでも、一定の効果を上げられることを研修会から学んだ。その授業実践に関しては別稿を参照して頂くとして^{*2}、紙上討論の方法と事例とをともに学べたことは、筆者にとっては今回の研修会の最大の成果であったと結論したい。

5. まとめ

過去3か年度の研修会では、コーディネーターとして教職員がどのように活躍できるのか、その可能性の検討に重点が置かれた。これに対して、今年度の研修会はコーディネーターの役割のみに留まらず、それを包摂するヘルパーとして、教職員がどのような学生支援を行なうことができるのかということにまで議論が発展した。

昨年度の研修会後、参加者のなかから実際にコーディネーター役を担当した教員も現れており、研修会が着実に成果を挙げつつあることが窺える。他方、実際の支援場面において、「コーディネーター」という名称が様々な概念を連想させるものであるがゆえ、支援者相互でその内容理解に齟齬が生じる可能性があるという課題も見えてきた。今後は、コーディネーターがどのような働きができるのかについて、コーディネーターの活動の記録化（共有資源化）のあり方の検討を含め、本学の事情をふまえつつ整理していく必要があるだろう。

今年度の研修会では、コーディネーターを含む一次的援助に関心が広がっていったことも特筆すべき点である。樽木講師の説明によれば、教職員は「複合的ヘルパー」に分類され、学生支援において多面的な役割を果たすこと、とりわけ一次的援助に携

わっていることに特徴があるという。一次的援助は授業前のガイダンスやオリエンテーションに代表されるように、すべての学生を対象としており、学生の困りごとの軽減あるいは予防になる可能性があるため、教育活動において重要な役割を果たすものと考えられる。しかしながら、一次的援助は日常的な教育活動のなかに埋もれてしまうことが多く、教職員が「これが一次的援助だ」という実感を持ちにくいという問題点がある。参加者からも「何が一次的援助か」という問いが提出され、すべての参加者でこの問題に向き合うことができた。今後、コーディネーターを含む一次的援助そのものを検討の対象としていく必要性を感じさせられた。

【注】

- * 1 学校心理学における「コンサルテーション」
とは、「異なった専門性や役割をもつ者同士が子どもの問題状況について検討し今後の援助のあり方について話し合うプロセス（作戦会議）」を意味する（石隈，1999）²⁾。
- * 2 いじめ研究において、いじめ対応の成否の鍵は傍観者にあると理解されている。いじめ対応については様々な方法が模索されているが、とりわけ、小学校の学級活動において傍観者の意識変容を促すことに成功した紙上討論の事例は

注目される（今泉博：学級経営と教育相談（小学校）―「いじめ」「不登校」問題をどう対応するか・広木克行（編），教師教育テキストシリーズ14 教育相談，学文社，東京，2008，pp51-67）。そこで、樽木らは、この紙上討論の事例を大学の授業実践で取り上げ、その授業から受講生が何を学び得たのかを検討した（樽木靖夫，福田八重，高田麻美：「いじめ」について大学生を対象とした授業実践の検討―学級集団を対象とした指導方法に焦点をあてて―，帝京科学大学紀要，11: 115-127, 2015）。

【参考文献】

1. 樽木靖夫，他5名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告，帝京科学大学紀要，10：273-277, 2014. 樽木靖夫，他8名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告(2)，帝京科学大学紀要，11：231-235, 2015. 榊原健太郎，他8名：学生支援におけるチーム援助コーディネーター養成研修についての報告(3)，帝京科学大学紀要，12：193-197, 2016.
2. 石隈利紀：学校心理学―教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス―，誠信書房，東京，1999.